

たまには映画館へ行こう

牧師 山本 護

畑の中のポツンと映画館、塩尻の東座へ行き「MASS／対峙」を観ました。米国の学校で時折起こる銃乱射事件。そんな事件の加害者生徒の両親と、殺された生徒の両親四者の対話記録か



ら、F.クラantzという人が脚本を書き監督をした映画です。四者の混乱や裁き、怒りや赦しが抑えられた演出で表わされ一瞬たりとも目が離せない。「対峙」の場は、彼らと縁故のない小さな教会の一室。セラピストがその場を設定し、導入部と終結部に姿を見せる二人の教会関係者が、ひと気が少なくなった田舎町の教会事情を物語っています。

イエスは、姦通の女を責め立てる正義を任じる人々に対し、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まずこの女に石を投げなさい(ヨハ8:7)」と言った。すると年長者から始まって一人、一人と立ち去って誰もいなくなった(8:9)。彼らの当惑や悔恨の表情は記されていない。銃乱射事件の対話記録にも四者の表情は記されていないが、クラantz監督は彼らの目の色の変化や唇の震え、口調やイントネーションを克明に描いている。作り話に仕立てたのではなく、対話記録の底にある思いを掘り起こして映像にしたのです。

人々が立ち去ると「イエスひとりと、真ん中にいた女が残った(7:9)」。力なく呆けてしまった女の顔、遠くを見ているようなイエスのまなざし。福音書の御言葉にはありませんが、そんな表情が思い浮かびます。イエスは「わ

たしもあなたを罪に定めない。行きなさい(8:11)」と言い、女を家に帰した。女の顔は安堵したものに変ったか。いや、そうではあるまい。よろりと立ち上がり、怒ったように慥然として、とぼとぼ歩き出したのではないか。

対峙したことによって四者には何かしら和解の兆しが見えたが、それぞれ顔に翳りを残して帰って行きます。対峙する以前には翳りさえなく、無表情で「あの時」から一步も前に進めない心の芯が暗示されていた。イエスに赦され「行きなさい」と言われたあの女も、彼らのように帰って行ったのだと思います。

ほとんど音楽のない映画でしたが、エンディングに使われていた讃美歌「Blest be the tie that binds(1782)」、1954年の日本語版では「403 かみによりて」。神の祝福で結ばれている絆があるから「ちちのまえにせつに祈らん 望みも恐れも ともにおなじ(2節)」なのだな。じわりと何か胸にこみ上げました。Ω